

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

船が育んだ江戸：百万都市・江戸を築いた水運 (4)
恵み：商品・取引・文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東京海洋大学附属図書館, 東京海洋大学明治丸海事ミュージアム, 山縣記念財団, 苦瀬, 博仁, 大浦, 和也, 中山, 剛志, 森本, 博行, 久染, 健夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2684

船が育んだ江戸

～百万都市・江戸を築いた水運～

(4) 恵み ―商品・取引・文化―

図 録



溪斎英泉「江戸八景 日本橋の晴嵐」
(国立国会図書館所蔵)

2020年 11月17日(火) ～ 2021年 2月16日(火)

会場

東京海洋大学 越中島キャンパス 明治丸記念館

主催：東京海洋大学附属図書館

共催：東京海洋大学明治丸海事ミュージアム

後援：一般財団法人 山縣記念財団

ごあいさつ

東京海洋大学附属図書館越中島分館の企画展示「船が育んだ江戸～百万都市・江戸を築いた水運～」を開催するにあたり、ごあいさつ申し上げます。

本展は、水運の観点から百万都市・江戸の誕生と成長の姿を解き明かそうとするもので、「海」、「川」、「船」、「恵み」という4つのテーマに沿った全4回のシリーズとして、平成29年度より開催を重ねてまいりました。最終回となる今回は、本シリーズの集大成として、「恵み-商品・取引・文化-」と題し、江戸への物資の流通と輸送ネットワークによってもたらされた「恵み」についてご紹介します。

河村瑞賢により開拓された西廻りと東廻りの航路により、全国各地の産物が江戸に集まるようになりました。また関東地方では、利根川東遷事業を始めとする河川改修事業により舟運が発達し、関東地方の産物も江戸に集まるようになりました。このように、江戸と全国各地を結ぶ輸送ネットワークが消費都市江戸への物資供給を支え、これにともない江戸の食文化も発展していきます。

東京海洋大学は、物産や食材について詳細に解説している『本朝食鑑』『日本山海名物圖』や、当時の料理本ともいえる『素人庖丁』『魚類精進 早見献立帳』など、多くの貴重な資料を有しています。本企画展示では、このような資料を通じて、文化という側面から江戸の発展を解き明かす一助としてご紹介できれば幸いに思います。

新型コロナウイルス感染症の拡大状況は現在も予断を許しませんが、東京海洋大学では、感染防止対策を十分に検討するとともに、ご来場される方々に種々のご協力をお願いすることで、企画展示を安全に開催できると判断いたしました。この機会に、古の江戸に思いを馳せ、知的好奇心を満足させてみてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、今回を含め、4年間に渡り開催にご協力いただきましたすべての関係者の皆様に、篤くお礼申し上げます。

令和2年 11月
東京海洋大学附属図書館長 井関 俊夫

目次

1. 廻船で江戸を酔わせた上方の酒文化-----	4
江戸を潤す下り荷物 -----	4
江戸時代の物流を支えた樽廻船 -----	5
下り酒の流通 -----	7
下り酒に酔いしれた江戸の人々 -----	8
2. 上州からの山の幸　―利根川で結ぶ江戸― -----	9
水陸交通の要衝、上州 -----	9
利根川水運と河岸の広がり -----	10
利根川水運の最上流河岸、倉賀野 -----	11
利根川がもたらした「恵み」 -----	12
3. 江戸湾の海の幸　―江戸前の昔と今― -----	13
江戸時代の江戸前と魚 -----	13
江戸湾沿いの漁場 -----	14
江戸への輸送方法と船 -----	15
食文化を支えた江戸前の魚 -----	16
4. 川と船が醸成した江戸文化-----	17
船がつなぐ関東と江戸 -----	17
小名木川を通過した積み荷と査検方法 -----	18
小名木川を行きかう参詣客と物見遊山 -----	19
江戸の日常と船 -----	20
江戸の年中行事と船 -----	21
展示目録 -----	22
おわりに（企画展示の全4回を振り返って） -----	25
附属図書館越中島分館、これまでの展示 -----	26

1. 廻船で江戸を酔わせた上方の酒文化

清酒が登場した江戸時代、上方で生産された清酒の大半が江戸で消費されていました。

ここでは、上質な下り酒を生産できた上方の酒造り、上方・江戸間の輸送を担った樽廻船の活躍、江戸での下り酒消費、江戸に根付いた酒にまつわる文化をご紹介します。

江戸を潤す下り荷物

上方から送られる「下り」荷物

江戸には幕府や諸藩の武士のほか、町人も含め数多くの人々が暮らしていました。こうした江戸で暮らす人々が必要とする物資は様々な場所から集められ、とりわけ上方からは多くの物資が供給されていました。

こうした遠隔地への物資供給を実現していたのは、菱垣廻船や樽廻船といった廻船で、江戸時代の初頭である元和5年（1619）大坂から木綿・油・綿・酒・酢・醤油といった品物を堺（現在の大阪府）の商人が紀州（現在の和歌山県）の船を借りて江戸へ送ったのが最も古い記録とされています。

これ以降も米・糠・素麺・鯉節・砂糖・藍玉・蠟燭など、江戸の暮らしが豊かになるに連れて、上方から送られる物資は量・種類ともに増えて行きました。こうした物資は、上方から江戸へ下ったという意味で「下り〇〇」といった呼ばれ方をしていました。

下り酒人気の理由

江戸時代の初期に上方で開発された清酒は、江戸で下り酒と呼ばれて人気でした。この下り酒の産地の中でも、摂津国（現在の大阪府・兵庫県の一部）にある大坂三郷・伝法・北在・池田・伊丹・尼崎・西宮・兵庫・今津・上灘・下灘と、和泉国（現在の大阪府南西部）にある堺は上質な清酒を江戸へ向けて生産することから、江戸積摂泉十二郷として知られていました。現在も兵庫県にある灘地域（西宮市・神戸市）は日本酒造りをリードする地として知られており、令和2年度には日本遺産に認定されています。それでは、この下り酒の人気を支えた質の高い酒はどのように生み出されたのかについて見ていきましょう。

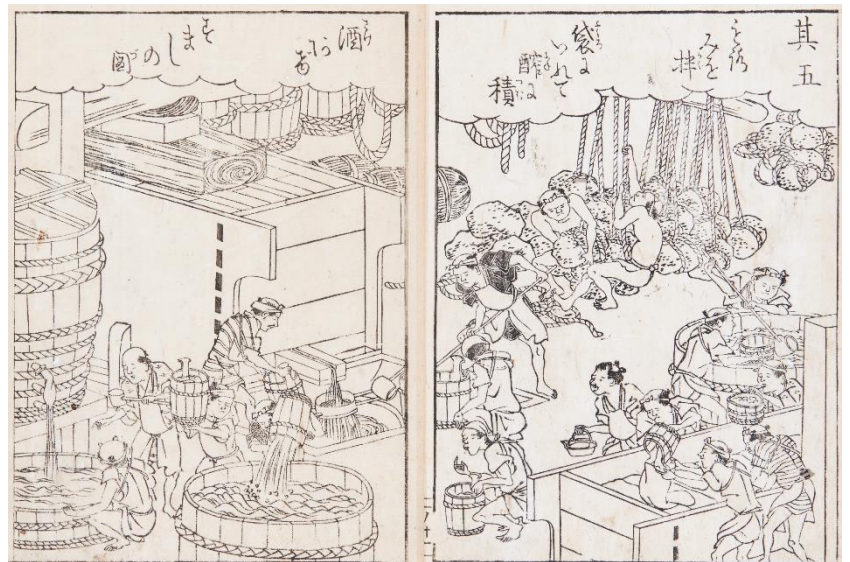
上方で質の高い酒を生産できた理由の一つは、良質な材料に恵まれていたことです。酒造りに適した米は、大粒であることや中心部分が白く見える心白（しんぱく）があることが特徴とされており、昭和11年（1936）に兵庫県で開発され、現在でも酒米の王様とも称される山田錦はこの条件を満たしています。この山田錦が兵庫県で開発されたのは偶然ではなく、江戸時代から山田錦を生み出した播磨地域をはじめとする兵庫県域では酒造りに適した米が取れることが知られており、摂津国の酒蔵は優れた酒米を手に入れやすい環境にありました。また、こうした原料米を精米する際、一般的には足踏み精米が用いられていましたが、この地域では水車を利用した精米を行い、足踏み精米と比べて短時間で多くの糠を取り除くことができました。

酒造用水についても各地の酒蔵でそれぞれ吟味されていましたが、西宮の地下水である宮水の名はよく知られています。宮水には、酒のアルコール発酵を助ける成分が含まれる一方で、品質を落とす原因の一つである鉄分の含有量が少なく、酒造りに適しています。幕末の天保11年（1840）に灘魚崎（神戸市東灘区）の酒造家山邑太左衛門（やまむらたざえもん）が、宮水の酒造適性に気づいて以降、西宮や灘地域の酒蔵では競ってこの宮水を使った酒造りが行われました。

こうした良質な材料を使って酒造りを行う丹波杜氏（たんぱとうじ）たちの技術も上質な下り酒を生み出すことができた理由の一つです。冬の農閑期になると丹波国南部（現在の兵庫県丹波地域）から摂津国の酒蔵へ出稼ぎにやってくる丹波杜氏たちは、江戸の人々の嗜好に合わせた淡麗な味の酒造りや、酒造りの作業にかかる時間を短縮させたと言われています。

こうした良質な材料と優れた作り手によって、他の地域で造られる酒とは一線を画す質の高い酒が生み出され、江戸の人々の人気を獲得していったのでした。

参考文献：柚木学『近世灘酒経済史』（ミネルヴァ書房、1965年）



『日本山海名産図会』酒造りの様子
（白鹿記念酒造博物館所蔵）

江戸時代の物流を支えた樽廻船

樽廻船の輸送能力と船数

江戸時代後期になると、下り酒の需要は一層高まり年間100万樽を超える酒樽が樽廻船によって江戸へ送られる年もありました。こうした需要に応えるため、上方の酒造家は樽廻船の経営にも参入し、酒造家の出資によって大型廻船が次々に建造されていきました。それでは、当時の大型廻船について詳しく見ていきましょう。

酒造家による廻船経営が定着した江戸時代後期には、どれほどの規模の廻船が活躍していたのでしょうか。西宮の酒造家辰屋吉左衛門(たつやきちざえもん)が幕末期に所有していた樽廻船を例に見ると、辰吉丸(1,500石)・辰悦丸(1,600石)・喜悦丸(1,800石)・辰栄丸(1,650石)となっています。この内、辰吉丸は史料から2,700樽を輸送する能力を持っていたことがわかっています。つまりこの時期の樽廻船は2,500~3,000樽を一度の航海で輸送することができたと考えられ、こうした大型の樽廻船が一年に何度も上方・江戸間を往復していました。

では、このような大型の樽廻船は、この時期どれほど存在していたのでしょうか。白鹿記念酒造博物館に残る「樽廻船名前控(たるかいせんなまえひかえ)」からは、元治元年(1864)3月時点で運航していた樽廻船の艘数を知ることができます。この史料をまとめた6ページ掲載の表からは、樽廻船が78艘存在し、大坂の樽廻船問屋6軒と西宮の樽廻船問屋4軒に所属していたことがわかります。また、これら樽廻船の船主はいずれも上方に居住し、西宮・御影・魚崎などといった酒蔵地帯に多いことにも注目されます。

樽廻船による年貢米輸送

ここまで見てきたように、上方から江戸へ大量の酒樽輸送を実現していた樽廻船ですが、実は酒以外の物流にも深く関わっていました。江戸へ送る酒樽の量が少なく輸送能力に余力がある場合は、その他の「荒物」や「荒荷」と呼ばれる酒樽以外の物資を積み込んで江戸へ運んでおり、こうした樽廻船による酒樽以外の物資輸送は、本来その担い手である菱垣廻船の仕事を奪ってしまい、衰退の原因になったと考えられています。

このほか、幕府や大名領で収納された年貢米の輸送にも樽廻船は従事していました。幕府は全国各地に点在する領地で収納された年貢米を、江戸や大坂の蔵へ運ぶ必要があり、諸大名たちは、国元で収納した年貢米を大坂で売り捌いたり、江戸藩邸へ物資を運んだりする必要がありました。幕府や藩の大切な財産である米などの荷物を確実に目的地へ輸送するため、富裕な酒造家の出資による大型で頑丈な樽廻船が利用されました。先ほど紹介した辰屋吉左衛門所有の樽廻船も、越後・佐渡・羽羽庄内・丹後といった、本来の酒樽輸送では航海しないはずの日本海へも出航し、公的な荷物輸送の仕事に請け負っていました。

こうした幕府や大名から請け負う仕事は、通常の酒樽輸送よりも高い運賃を得られるメリットがありました。しかし、酒樽輸送の繁忙期である春・秋を避けた夏・冬に実施されることが多く、海が荒れる時期の航海となったことから海難事故に遭ってしまうこともしばしばありました。

参考文献：柚木学『近世灘酒経済史』(ミネルヴァ書房、1965年)

柚木学『近世海運史の研究』(法政大学出版局、1979年)



『摂津名所図会』上方・江戸を結ぶ廻船が集まる大坂安治川河口の様子
(白鹿記念酒造博物館所蔵)

樽廻船問屋が扱った船(船主、船名、船頭)

江戸時代後期になると、下り酒の需要は一層高まり年間100万樽を超える酒樽が樽廻船によって江戸へ送られる年もありました。

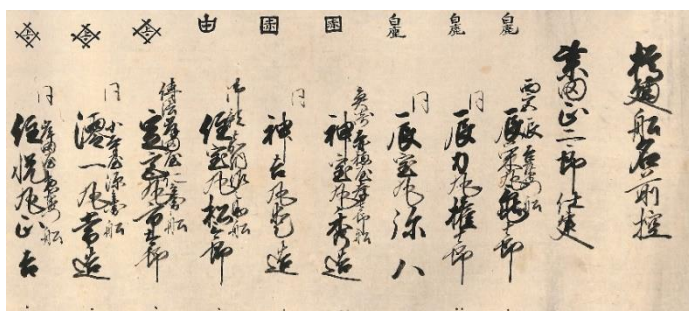
大坂の樽廻船問屋が扱った船

樽廻船問屋名	船主	船主の居所	船名	船頭名
柴田正二郎	辰吉左衛門	西宮	辰栄丸	亀十郎
	辰吉左衛門	西宮	辰力丸	権十郎
	辰吉左衛門	西宮	辰宝丸	弥八
	赤穂屋孝七郎	魚崎	神宝丸	秀造
	赤穂屋孝七郎	魚崎	神吉丸	愛造
	嘉納作之助	御影	住宝丸	松三郎
	岸田屋仁兵衛	伝法	定宮丸	市太郎
	小寺屋源兵衛	伝法	滯一丸	常造
	岸田屋惣右衛門	伝法	住悦丸	正吉
木屋市蔵	木屋市蔵	大坂	住吉丸	平五郎
	松屋又左衛門	大石	住吉丸	松太郎
	松屋甚右衛門	大石	観音丸	伊太郎
	岸田屋仁兵衛	伝法	住社丸	吉五郎
	堺屋庄之助	大坂	吉豊丸	芳蔵
	木屋又兵衛	大坂	住栄丸	福十郎
	松屋甚右衛門	大石	祇園丸	常八
毛馬屋五郎	日向屋善右衛門	兵庫	正吉丸	常六
	材木屋甚助	御影	喜悦丸	福太郎
	赤穂屋為助	魚崎	住幸丸	半太夫
	灘屋七郎兵衛	不明	明栄丸	萬助
	毛馬屋彦太郎	大坂	正旋丸	彦十郎
	毛馬屋五郎	大坂	安旋丸	大五郎
	毛馬屋五郎	大坂	神旋丸	市次郎
	河内屋藤九郎	大石	住宝丸	秀五郎
小西新右衛門	岸田屋仁兵衛	伝法	神祐丸	市三郎
	岸田屋仁兵衛	伝法	住星丸	善之助
	岸田屋仁兵衛	伝法	住宝丸	弥三郎
	松屋甚右衛門	大石	辨財丸	伊兵衛
	梶屋重兵衛	兵庫	住力丸	善太郎
西田正十郎	千足利作	今津	福悦丸	利七
	山路十兵衛	魚崎	重力丸	十蔵
	大和屋徳造	御影	加吉丸	権次郎
	嘉納弥兵衛	御影	嘉福丸	増十郎
	嘉納弥兵衛	御影	嘉福丸	米十郎
	鍵屋与助	御影	宝珠丸	徳十郎
	鍵屋与助	御影	壽通丸	徳之助
	丸屋新兵衛	大石	栄龍丸	松兵衛
吉田亀之助	若林茂左衛門	石屋	神栄丸	正太郎
	沢田屋重右衛門	御影	永宝丸	萬助
	嘉納次郎作	御影	利涉丸	保次郎
	嘉納次郎作	御影	寶吉丸	松太郎
	嘉納次郎作	御影	利運丸	茂吉
	淡路屋善右衛門	兵庫	航栄丸	善太郎
	竹中文四郎	御影	亀福丸	半十郎
	吉田亀之助	大坂	天祐丸	久太夫
	吉田亀之助	大坂	寶積丸	善十郎

西宮の樽廻船問屋が扱った船

樽廻船問屋名	船主	船主の居所	船名	船頭名
藤田伊兵衛	辰与左衛門	鳴尾	辰栄丸	半六
	千足利作	今津	三社丸	権八
	問屋惣右衛門	池田	観妙丸	利十郎
	四井益太郎	西宮	伊豊丸	弥平
	八馬喜兵衛	西宮	光吉丸	金吉
	八馬喜兵衛	西宮	妙法丸	常吉
	八馬喜兵衛	西宮	好日丸	伊右衛門
	四井信助	西宮	嘉悦丸	一二郎
	四井信助	西宮	勢悦丸	勝六
	辰吉左衛門	西宮	辰悦丸	亀之助
	油屋金兵衛	御影	伊勢丸	保蔵
	油屋金兵衛	御影	三運丸	勢十郎
	若林与兵衛	稗田	安政丸	常助
	枅屋吉次郎	大和屋徳造	御影	利吉丸
大和屋万右衛門		御影	金光丸	重太郎
灘屋富五郎		御影	住吉丸	富五郎
辰与左衛門		鳴尾	安全丸	與右衛門
枅屋吉次郎		西宮	嘉吉丸	富三郎
枅屋吉次郎		西宮	清壽丸	三八
枅屋吉次郎		西宮	徳栄丸	久右衛門
千足甚左衛門		西宮	稻荷丸	百松
千足甚左衛門		西宮	稻神丸	為次郎
大津屋新十郎		兵庫	稻荷新造	若松
讃岐屋市兵衛		神戸	神福丸	保吉
辰半右衛門		鳴尾	福應丸	保次郎
辰権蔵	四井信助	西宮	歓悦丸	五六吉
	四井信助	西宮	喜悦丸	二三郎
	嘉納甚吉	御影	嘉宝丸	秀一郎
	材木屋孫一郎	御影	明宝丸	徳太郎
	辰半右衛門	鳴尾	辰丸	半兵衛
	辰半右衛門	鳴尾	壽栄丸	保太郎
塩屋孫助	嘉納欽	御影	嘉生丸	早太郎

樽廻船名前控(大坂樽廻船問屋、柴田正二郎分)
(白鹿記念酒造博物館所蔵)



下り酒の流通

下り酒問屋

ここからは江戸へ到着した酒樽がどのように消費者のもとへ届けられたのかを見ていきましょう。上方の酒造家は酒を樽廻船で江戸へ輸送していましたが、送り先は江戸での酒の販売を担っていた下り酒問屋でした。この下り酒問屋は、新川や茅場町に集まっており、その繁栄ぶりは、『江戸名所図会』や錦絵などから窺い知ることができます。

この下り酒問屋から仲買・小売を通して消費者のもとへ届けられる酒樽には菰が巻かれており、そこには銘柄や宣伝文句が記されていました。絵画史料には、剣菱印がよく登場していますが、実際には様々な銘柄が流通していました。例として西宮の酒造家辰屋吉左衛門が、どのような銘柄を出荷していたのかを見てみましょう。辰屋吉左衛門は「白鹿」銘柄をメインに生産していましたが、他にも「文蝶」「鱗」「鹿」「江都花」「あゝ嬉」「白虎」「吉辰」「江戸一」「白鷹」「歓悦」「辰泉」といった銘柄を出荷していたことがわかっています。また、同じ「白鹿」銘柄であっても鹿島利右衛門と小西利右衛門へは異なる字体を用いたり、「辰泉」は高橋門兵衛、「あゝ嬉」は千代倉宗兵衛といったように、送り先の下り酒問屋ごとに異なる銘柄を出荷する傾向にあったと考えられます。

また、菰に記されていた宣伝文句も様々なものがあり、「吟造」など丁寧に造った酒である事などが表現されています。中には「西宮水」と判を押して、良質な材料である宮水を使った酒造りをアピールするものもありました。



左：銘柄意匠 辰泉（高橋門兵衛）
中：銘柄意匠 白鹿（鹿島利右衛門）
右：銘柄意匠 白鹿（小西利右衛門）
（白鹿記念酒造博物館所蔵）

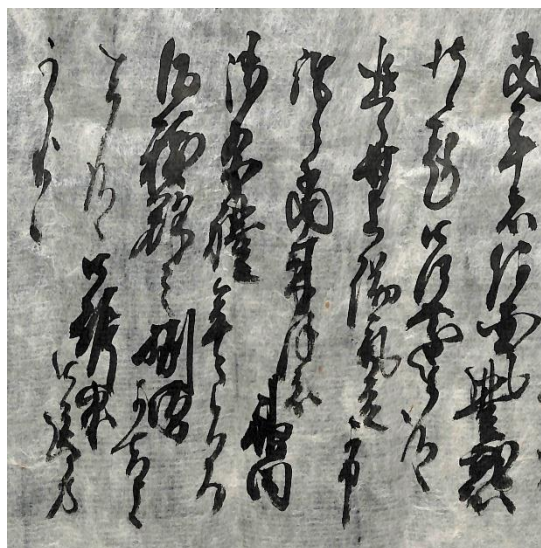
下り酒の価格と販売状況

では、こうした酒樽はどれぐらいの値段で取引されていたのでしょうか。下り酒問屋から上方酒造家へ販売実績を報告するために作成された史料からは、酒樽の販売金額を知ることが出来ます。万延元年（1860）の「白鹿」印の酒樽の取引では、4月の取引で20樽を金22両、1樽（4斗樽で中身はおおよそ3斗5升入）あたり1両余りの値段であったことがわかります。その後、値段は上下しながら推移し、11月の取引では20樽が30両となり4月と比べて割高となっていました。このような酒価の変動は、江戸の人々の需要・米その他の物価・樽廻船の運航具合による在庫量など様々な現象から影響を受けていました。

次に、下り酒問屋から上方酒造家にもたらされる書状から、江戸での販売状況の様子を見てみましょう。まず、酒の販売状況が上向きとなるのは、どのような場合だったのでしょうか。下り酒問屋鹿島庄助から西宮の辰屋吉左衛門に送られた書状には「追々世上陽気立可申、殊二当来月者神田御祭禮二候間酒抜群之捌増可有之奉存候」と記され、神田祭の時に販売状況が良くなっていたことが読み取れます。他にも山王祭等の祭礼の時は、酒が良く売れていたようです。反対に、販売状況が悪化する理由として、悪天候による人出の減少等が挙げられています。また、ペリー来航によって江戸の人々が様々な噂に惑わされ、酒の販売が減少するといった幕末特有の事情が酒の販売に影響していたことも書状に記されています。この様に下り酒問屋は、江戸市場の状況を事細かに上方酒造家へ書き送り、遠隔地でありながら情報共有を行って供給量の調整などを行っていました。



「江戸の華名勝会 千二番組」
（白鹿記念酒造博物館所蔵）



下り酒問屋 鹿島庄助からの書状
（白鹿記念酒造博物館所蔵）

下り酒に酔いしれた江戸の人々

江戸での酒の楽しみ方

多くの下り酒が江戸にもたらされたことで、自然と酒の楽しみ方が江戸の文化として根付いていくようになります。ここでは、当時の史料から下り酒消費の文化を見てみましょう。

江戸時代後期に刊行された草双紙や錦絵には、食事や飲酒をする情景が様々描かれており、当時利用されていた酒器について知ることができます。例えば、現在でも一般的に利用されている陶磁器で作られた徳利や猪口、そして現在では見かけない盃洗と呼ばれる酒器がよく描かれています。これらの酒器について、江戸時代後期に江戸と上方の風俗を記した『守貞謄稿』には、「江戸、近世、式正(しきしょう)ニノミ、銚子ヲ用ヒ、略ニハ爛徳利ヲ用フ。爛シテ、其俚(そのま)宴席(えんせき)ニ出スヲ専(もっぱ)ラトス。」と記され、従来利用されてきた漆器や鉄銚子に替わって、陶磁器製の徳利が江戸で広範に爛酒を飲むときに利用されていたことが紹介されています。この爛酒については草双紙の『教草女房形気(おしえぐさにようぼうかたぎ)』(下図左)に、火鉢で沸かしたお湯に爛徳利を入れて酒を温めている様子が描かれ、当時の利用方法について具体的に知ることができます。盃洗は「江戸の花名勝会 リ 十番組 浅茅が原(あさじがはら)」(下図右)に描かれているように、水を入れた鉢のような物で、酒を酌み交わす際に自らが飲んだ盃や猪口を鉢に溜めている水で洗って相手に渡したり、ここに描かれているように猪口を浮かべて楽しんだりしていたと考えられています。このように、酒器にも様々な工夫が施されるようになっていました。

酒器以外の工夫としては、『東海道中膝栗毛(とうかいどうちゅうひざくりげ)』の作者として知られる十返舎一九(じっぺんしゃいっく)が、『手造り酒法』を刊行し、酒と蜜柑の汁とを混ぜ合わせて飲む等といった酒のアレンジ方法を紹介しています。このように、江戸時代後期には、酒の楽しみ方は多くの分野に広がりを見せていました。

酒にまつわる刊行物

こうした江戸での飲酒文化の浸透は、酒にまつわる文学作品をも生み出すきっかけとなりました。例えば、酒を飲み過ぎるとどうなるのかを題材とした滑稽本に『つきぬ泉』や『無而七癖酩酊気質(なくてななくせなまえいかたぎ)』があります。どちらの作品も、人によって酒に酔うと表れる様々な癖を題材としています。この癖も様々な種類があり、例えば「為強(つよがり)上戸」「多言(たごん)上戸」「くどい上戸」「こごと上戸」等が挙げられています。この内一例を紹介すると、「笑ひ上戸」については、「実のわらひ上戸は、おかしくもあらぬことを腹をよらして笑ひ入(いり)、ほとんどわらひ中風(ちゅうふう)といふ病(やまい)の如く自留所(みずからとどまる)ところなきをいふなり」といったように、いずれの酒癖についても辛辣に、しかしユーモアを交えて紹介されています。

この他にも、酒やその他の食物を擬人化して戦わせるユニークな作品も残されています。その一つが酒餅論です。これは酒と餅(菓子)を擬人化し、それぞれが長所を主張して争いとなる様子が描かれています。登場人物の出で立ちや名前は、酒・餅の銘柄・種類や産地をもじった設定にし、最終的には米が原料であることから和解するという内容で描かれています。このような作品からは、下り酒が江戸に受容され、文化として定着している様子を感じることができます。

参考文献：成瀬晃司「江戸における日本酒流通と飲酒習慣の変遷」(江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』吉川弘文館、2000年)、畑有紀「『酒餅論』をめぐる江戸後期の酒と菓子」(財団法人たばこ総合研究センター助成研究報告、2014年)



『教草女房形気』(爛徳利) 右の女性が火鉢で沸かしたお湯に徳利を入れて酒に爛をしています
(白鹿記念酒造博物館所蔵)



「江戸の花名勝会 リ 十番組」
上部に徳利と盃洗が描かれています
(白鹿記念酒造博物館所蔵)

2. 上州からの山の幸 ―利根川で結ぶ江戸―

戦国の世が終わり、江戸が政治・経済の中心地として発展すると、江戸には多くの人が集まるようになり、それに伴い多くの物(物資)も必要になりました。このことから、陸上交通よりも大量に、安全に、安価に運ぶことのできる水上交通が発達していくこととなります。ここでは、幕藩体制の安定とともに、江戸の発展を支える存在となった上州(上野国、以下上州で統一)の地域性を明示し、利根川水運で運ばれた山の幸をはじめとする物資を紹介し、利根川の恵みと江戸と上州の関係性を考えます。

水陸交通の要衝、上州

上州の陸上交通と関所

江戸幕府は、主要道である五街道と脇往還を張り巡らせ、江戸を中心とする全国的な陸上交通体系を築き上げました。上州の北には佐渡国の金山、東には下野国の足尾銅山や日光東照宮などの直轄地が控えており、右図に示すように、中山道や日光例幣使道、足尾銅山街道、三国街道などの重要幹線が縦横に通るだけでなく、庶民の道として物資の輸送が盛んだった信州街道や下仁田道などの脇往還も発達しました。寛文2年(1662)、信州街道の大笹関所と草津道の狩宿関所が設置されましたが、これは江戸時代における最遅の設置関所です。寛文期は江戸・大坂の二大消費地への流通機構が整っていった時期でもあることから、両関所の設置は、上州の陸上交通における人と物の往来が活発化していたことを示していると言えます。

また、上州には中央を貫き、武蔵との国境沿いを東へと流れる日本有数の河川である利根川が流れています。その利根川流域には川の港である河岸が数多く存在し、陸上交通の発達した上州は、その両者が密接に結節する多くの人と物が行きかう地でした。このことから、幕府は江戸の守りを固めるために上州に多くの関所を設置しましたが、その数は全国一の14カ所に上ります。寛文期以降、政治・経済の中心地である江戸を支える防衛・流通の要地として、上州は重要な役割を果たしました。



近世上州の主な街道と関所
(中山剛志「交通史から見る近世上州と関東の地域性」
『群馬県立歴史博物館紀要第35号』より)

4つの川関所と上州の河川

上州には全国一の数である14カ所の関所が設置されたことは前述しましたが、その中でも大渡、実政、福島、五料の4関所は、陸路ではなく利根川沿いに設けられた川関所でした。延享2年(1745)の「諸国御関所覚書」及び「諸国御関所書付」には、全国53カ所の関所が「重御関所」20カ所と「軽御関所」33カ所に分けられていますが、福島と五料(写真右参照)は「重御関所」として位置付けられていました。特に、五料は道中奉行管轄下にある日光例幣使道唯一の関所であり、幕府が重視していたことがうかがえます。

このように、4つの川関所が設置されていた上州には、吾妻川や鐺川、神流川、烏川などの多くの河川が流れていますが、これらは全て上州内で利根川に合流していきます。上州国内を流れる河川を集める利根川は、内陸関東と江戸とを密接に結びつける水上交通の大動脈として、大きな役割を果たしました。この利根川を通して上州に集まった様々な物資は、江戸をはじめ各地へと運ばれていきました。



五料関所跡(著者撮影)

中央の道を直進すると、その先に利根川が見えてきます。現在は2つの門柱の礎石と井戸跡が残っています。

利根川水運と河岸の広がり

利根川水運発展の背景

江戸時代の物流の中心は水上交通でした。角倉了以の活躍によって富士川や天竜川、高瀬川の開削が進められ、関東地方においても利根川東遷事業が承応3年(1654)に完成しました。これにより、内陸地と消費地、関東各地と江戸とを結ぶ河川交通が整備されていきました。また、幕府は全国各地の幕領の年貢米を江戸へと円滑に運搬するため、河村瑞賢に命じて東廻り・西廻り海運の整備を進め、寛文12年(1672)には水上交通による輸送機構を確立させていきました。江戸と大坂を結ぶ南海路も発達して二大消費地が密接に結びつくと、江戸幕府の安定に伴い、商人荷物の輸送もさらに活発となっていきました。

では、利根川水運発展の背景にあるものとは何でしょうか。その要因の一つは、前述のように、幕領や旗本領、各藩主の城米・年貢米の江戸への輸送です。米を陸路で運ぶには、通常は重量制限により馬や牛に2俵までとされていました。また、宿継ぎでもあることから荷崩れも多く、遠方への輸送は可能な限り近い場所で船に積み替えることが求められました。こうしたことから、内陸地には河川の流域に河岸が発達しました。幕府は水上交通の発展に伴い、江戸までほぼ同一距離でありながら河岸や湊によって運賃がまちまちであった点を是正するとともにその把握を行い、元禄3年(1690)に「関八州伊豆駿河国廻米津出湊浦々河岸之道法并運賃書付」を示しました。河岸側にはその調査における同年の「国々所々御城米運賃改帳」が残っており、両方に記載された関東地方の河岸を調べると、元禄年間に86ヶ所あったことが分かります。この時の幕府の調査では把握されていない河岸も含めると、江戸時代を通じて関東地方には200ヶ所もの河岸が存在していたことが確認できます(下図参照)。

利根川と上州の河岸

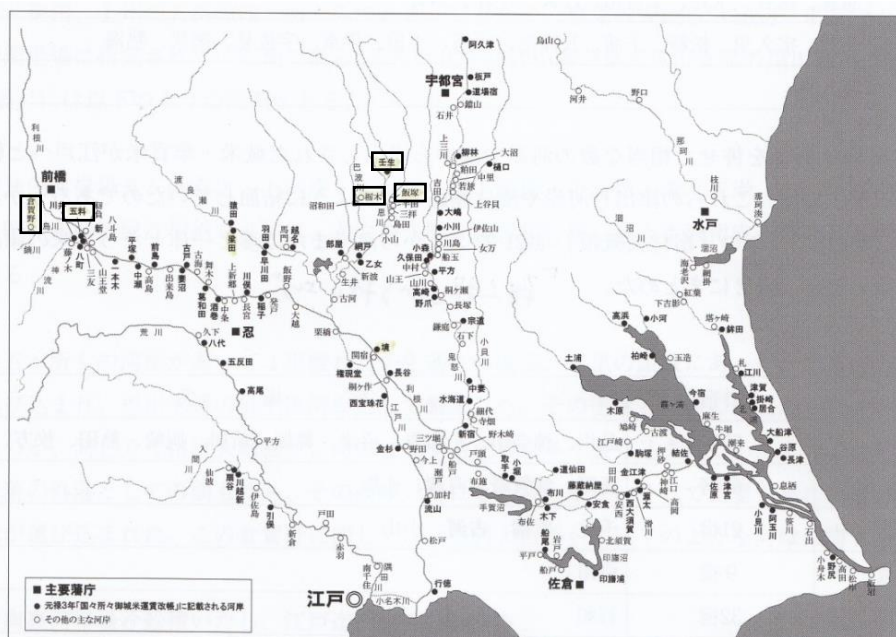
内陸関東の上州と隣国の下野国には、下図にあるように江戸への物資輸送を担う多くの河岸がありましたが、両国の役割には違いがあったのでしょうか。ここでは、天保14年(1843)の『宿村大概帳』を活用して、水陸交通の要衝であった両国の地域性を確認していきます。

『宿村大概帳』には幕府管轄下の235宿の情報が記載されていますが、河岸に関連する特記事項のある宿場として上州の倉賀野、下野の壬生、飯塚、下総の古河、武蔵の栗橋の5宿が挙げられます。次に、複数の宿場から城米・年貢米が運び込まれる河岸と一体化した宿場を調べてみると、上州の倉賀野、五料、下野の栃木、壬生、甲斐の石和、美濃の起、大垣の7宿があります。ここでは上州と下野に注目しますので、宿場と河岸を兼ね備えた倉賀野・五料・栃木・壬生・飯塚の5宿を下図で確認してみます。それぞれの河岸が立地する河川に目を移すと、上州の場合、倉賀野が位置する烏川は、鎗川と神流川を合わせて利根川と合流して一つの流れとなっていきますが、下野は栃木が位置する巴波川や壬生、飯塚の所在する思川の他にも、渡良瀬川や鬼怒川、小貝川などが幾筋も単独に存在しています。下野はそれぞれの河川による江戸へのルートがあるのに対し、上州は利根川一本に帰一します。この点が、両国の地域性における大きな違いであると結論づけることができます。上州にとって、江戸と上州を一本の道で結びつけた重要な河川である利根川には、数多くの物資が積まれた以下のような高瀬舟が活躍し、利根川水運の物流を支えました。



高瀬舟模型(群馬県立歴史博物館蔵)

セイジと呼ばれる船頭や乗組員が生活する船室が前部に付いているのが「上州ヒラタ」の特徴です。同じく関東地方で活躍した「川越ヒラタ」は後部に付いています。300俵積みの船の輸送力は非常に大きく、馬・牛100頭分に当たります。こうした大型船が江戸と上州を行き来しました。



関東地方の主な河岸分布

(中山剛志「交通史から見る近世上州と関東の地域性」
『群馬県立歴史博物館紀要第35号』より加筆)

利根川水運の最上流河岸、倉賀野

江戸と直結する倉賀野河岸

前節で述べたように、烏川に位置する倉賀野河岸は、利根川水運の最上流河岸であるとともに、上州で最も繁栄した河岸でもありました。右上の表は、安永4年(1775)の上利根川十四河岸組合の間屋人数を示したものです。倉賀野河岸は9軒と最も多く、取り扱う物量や品目が他の河岸よりも多かったことが推測できます。

倉賀野河岸における物資輸送の中心は、大名や旗本の城米・年貢米でした。右下の表は、享保9年(1724)における倉賀野河岸の間屋が扱った大名・旗本の廻米の一部を一覧にしたものです。信州の松本藩や松代藩は1万俵前後にも上り、全領主からの廻米を合計すると5万7000俵もの物量になります。倉賀野は五街道の一つである中山道の宿場町であり、利根川水運最上流河岸でもあったことから、西上州や信州の中東部・北部を治める領主の廻米を一手に引き受ける地理的に有利な条件が揃っていました。特に、天明3年(1783)の浅間山大噴火により利根川の川床が上がるまでは、300俵積みの大型船(前頁左下参照)が倉賀野と江戸を往復しており、まさに江戸と直結する河岸であったと言えます。諸方面から陸路で運ばれた城米・年貢米は倉賀野宿の間屋場まで運ばれ、さらに宿内の約300mほど南の河岸場(次頁右上写真参照)へと陸送され、川船に積まれて江戸へと運ばれました。

なお、前橋・沼田藩や吾妻郡の幕領・旗本領からの廻米は、烏川と利根川の合流地点に位置する川井・新・五料河岸に集められ、利根川を下りました。

上州からの山の幸

倉賀野河岸の間屋らが残した「文化二年道中御奉行石川左近将監様御掛旅人乗船出入一件始末書留帳」から、貞享2年(1685)に倉賀野河岸が取り扱った物資が確認できます。そこには、上州から江戸へ送られた物資として、たばこ・絹綿・麻、信州からたばこ・うど・からし・葺板との記載があり、廻米と同様に上州のみならず、信州の荷物も取り扱っていることが分かります。また、越後のぶりも取り扱っており、山の幸だけでなく海の幸までも含まれています。時代は下り、明和8年(1771)「倉賀野河岸概況口書」からは、米・大豆・麻・紙・たばこ・板貫を合計30,000駄程も運送していたことが分かります。両文書にあるたばこについては、沼田地方や高崎の館たばこが上州産として早くから有名で、麻についても北上州や西上州で盛んに生産されていました。

倉賀野河岸が西上州の拠点であったのに対し、東上州の中心的存在は、右上の表の7軒の間屋数が示すように平塚河岸でした。江戸幕府直轄の足尾銅山から運ばれる御用銅の積み出しを行う河岸で、銅輸送は元禄年間には下流の前島河岸へと移りましたが、伊勢崎・前橋地域、大間々から渡良瀬川上流にかけての地域、沼田の東方の片品川をさかのぼった追貝・老神周辺地域を後背地とし、多くの商品荷物を取り扱い、繁栄しました。河岸間屋北爪家に残る文化2年(1805)の「荷物船積帳」からは、薪・炭・材木・板類・木製品などが確認できます。薪については、文政元年(1818)の「新田郡本町村ほかニカ村持御林より伐出薪積出方取調書」から、幕府御林から切り出された薪を公用荷物として前島河岸と分担して積み出していることが分かります。倉賀野河岸では薪・炭は取り扱っていませんでしたが、上州国内の河岸に共通した「山の幸」の一つです。

その他に、江戸への下り荷物の特殊な形態として、筏の川下げがあります。材木の輸送として河川に直接流して下流へと運ぶ方法です。束にして流す筏流し(次頁写真参照)のほか、材木一本ずつ流す管流し(早ながしとも)がありました。

上利根川十四河岸組合の間屋人数(安永4・1775)
(群馬県史通史編5近世2(837頁)より加工・作成)

河岸名	間屋数	河岸名	間屋数
靱負河岸	1	八町河岸	2
平塚河岸	7	三友河岸	3
五料河岸	2	山王堂河岸	2
新河岸	3	八斗島河岸	2
川井河岸	6	壺本木河岸	7
倉賀野河岸	9	中瀬河岸	2
藤ノ木河岸	4	高島河岸	2

倉賀野河岸から廻米する大名・旗本(享保9・1724)
(群馬県史通史編5近世2(857頁)より加工・作成)

武家名	封地	請払米高(俵)	米宿
織田美濃守	上州小幡	1,500	須賀長太郎
内藤丹波守	上州安中	5,000~1,000	勅使河原八左衛門
前田丹後守	上州七日市	2,000	堀口八右衛門
内藤下総守	信州岩村田	—	須賀庄兵衛
水野隼人正	信州松本	9,500~16,000	黛新右衛門
松平伊賀守	信州上田	4,300~1,500	勅使河原八左衛門
牧野内膳正	信州小諸	3,000	須賀善兵衛
堀淡路守	信州須坂	3,000	堀口八右衛門
真田伊豆守	信州松代	12,000~9,000	須賀喜太郎
本多若狭守	信州飯山	2,500~500	須賀善兵衛

利根川がもたらした「恵み」

江戸が上州に与えた影響とは

江戸からの上り荷物は、食品関係では塩・茶・肴、繊維品では綿・太物、日用品では小間物・瀬戸物・水油などが見られます。これらの日常生活に必要な物資の他に、干鰯や糠などの肥料も運ばれました。文政～天保期と推定される平塚河岸の古文書からは、阿波の藍玉や昆布などの荷物も確認できます。

これらの物資は、享保期頃より盛んに上州に運ばれるようになりました。それに伴って人の交流も活発になり、書や絵画、俳諧をたしなむ文人も多くなっていきました。また、江戸で流行する歌舞伎や人形芝居などの芸能も人気を集め、養蚕・製糸業が盛んだった上州では、豊かな経済力を背景に、買芝居だけでなく、農民が自ら上演する地芝居も行われるようになりました。上三原田歌舞伎舞台(国指定重要有形民俗文化財・渋川市)や横室の歌舞伎衣裳(県指定重要文化財・前橋市)は、赤城山麓や利根・吾妻方面などの山間の地域にまで江戸の文化が広がっていたことを物語っています。



倉賀野河岸の河岸場の様子
倉賀野宿・河岸復元模型（群馬県立歴史博物館所蔵）

上州が江戸に与えた影響とは

江戸の影響を上州が色濃く受けていたことは前述のとおりですが、上州が江戸に影響を与えていた面はあったのでしょうか。上信地方の大名や旗本、幕領からの城米・年貢米輸送を担った上州は、江戸幕府を動かす支配層の根幹を支えていたと言えます。260年以上に及ぶ江戸幕府の安定は、円滑な廻米輸送が背景にあったと言っても過言ではないでしょう。日常生活に不可欠な燃料であった薪や炭、膨大な需要のあった材木の他に、たばこや麻、大豆や砥石など、上州産の山の幸が江戸の武士から庶民に至るまで、人々の暮らしを支え続けました。また、江戸城や上野の寛永寺の銅瓦に使用され、オランダにも輸出された足尾銅が、御用荷物として上州を經由して江戸へと運ばれていたことも見逃せません。政治・経済の中心地であった江戸を中心とする枠組みの中に位置付けられた上州は、幕末まで一貫して江戸を支える存在であり続けたのです。



筏流し
倉賀野宿・河岸復元模型（群馬県立歴史博物館所蔵）

利根川の恩恵

水陸交通の要衝であった上州には、倉賀野や平塚、五料など、まさに水上交通と陸上交通が密接に結節する地が存在し、これらの地は、内陸における重要なターミナルの役割を果たしました。こうした上州の地域性は、利根川が江戸と上州を結び付けたからに他なりません。

河川交通に必要な川船を作る船大工、それを操縦する船頭、その物資を扱う河岸問屋、行き交う人々が宿泊する旅籠屋、舟運の無事を祈る大杉信仰、河川・治水工事のための土木技術の向上など、これらは全て大自然利根川の流れの恩恵を基盤とし、人々の知恵と経験の結集によって成立し、育まれたものです。科学技術の進展により、江戸時代よりも便利な世の中になりましたが、新型コロナウイルスの流行は、私たちに「豊かさとは何か」と投げかけているようにも感じます。自然の恵みを活用しながら生活していた江戸時代から、今、私たちが学ぶべきものもあるのではないでしょうか。

参考文献：『群馬県史通史編5 近世2』(1991 群馬県)
『群馬県史資料編10 近世2』(1978 群馬県)
『群馬県史資料編14 近世6』(1986 群馬県)
『群馬県史資料編16 近世8』(1988 群馬県)
『群馬県立歴史博物館常設展示図鑑』(2017 群馬県立歴史博物館)
倉賀野雁会編『文献による倉賀野史・第2巻』(1985 朝日印刷)
須賀健一『須賀庄兵衛家由緒』第1部烏川に棹さして(1997)

3. 江戸湾の海の幸 ―江戸前の昔と今―

江戸は、江戸前寿司というように、江戸湾に面していたからこそ豊かな海の幸に恵まれていました。

江戸前といわれている場所で、様々な魚を海の幸として得ていました。その主たる漁場は江戸湾内であり、いくつかの港から日本橋の魚河岸に運ばれていました。もちろん江戸への輸送方法は船に頼っていました。そして、日本橋の魚河岸から江戸市中には、行商人が売りに出ていました。

ここでは、海の幸の魚に焦点を当てて、漁獲から販売までを追いかけるとともに、江戸前の昔と今を比べたいと思います。

江戸時代の江戸前と魚

「江戸前」とは

「江戸前」とは、文字通り「江戸の前」ということです。江戸時代、幕府は地方から多くの人々を集めて今日でいう街づくりを行います。これが17世紀末(元禄年間)には、町方人口が35万人、さらに30年後の享保年間には、武家も含めて100万人にも及ぶ世界有数の大都市となります。

これら多くの江戸市民が当初から豊富な魚介類に恵まれていたわけではなく、市場のような供給体制がすぐ整備されていたわけでもありません。しかし、いわゆる江戸湾には、時代による変遷があるものの、多摩川、隅田川、荒川、江戸川と狭い範囲に大きな河が流れ込んでおり、この海域に魚介類の種類も多かったであろうことは想像できます。時を下るにしたがって、漁法も改善され、さまざまな方法で集積された魚介類を取引する場としての「魚市場」も徐々に整備されていきます。

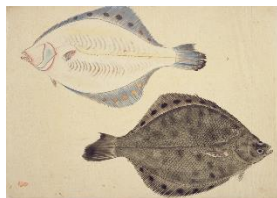
このような江戸湾の海の幸について、多様な魚の種類、漁場、河岸、水産物の運搬方法をご紹介します、今日に至る、日本独特の食文化である和食を象徴する魚食について考えてみましょう。

江戸の人々が食べた魚

江戸に住む人々は、様々な魚種を食されていたようです。

■ 春から夏

伊勢エビ 芝エビ ウナギ イワシ タイ ヒラメ
アマダイ メバルなど



伊勢海老・芝えび『広重魚尽』 ひらめ『魚類写生図』

■ 夏から秋

カツオ コチ スズキ トビウオ サバ カニ
ボラ アジなど



カツオ『魚類写生図』



アジ『魚類写生図』

■ 秋から冬

マス サケ タラ アワビ サヨリ キス サワラ
ブリなど



ブリ『魚類写生図』



サケ『魚類写生図』

(出典：歌川廣重『広重魚尽』、木村静山『魚類写生図』
国立国会図書館所蔵)



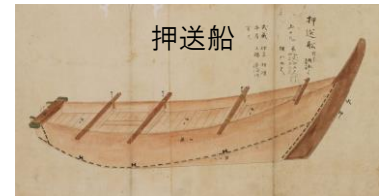
(出典：鈴木理生、「スーパービジュアル版、江戸・東京の地理と地名」、
日本実業出版社、2006)

江戸への輸送方法と船

押送船(おしおくりぶね、おしよくりぶね)

押送船(おしおくりぶね、おしよくりぶね)は、魚介類を魚市場に運んだ船で、江戸時代特有の和船です。この船は帆走・漕走併用の小型の高速船で、享和3(1803)年には、江戸周辺で64隻が運用中だったとの記録があります。細長い船体と鋭くとがった船首を持つのが特徴で、全長38尺5寸(11.7m)・幅8尺2寸(2.5m)・深さ3尺(0.9m)の船体で、3本の着脱式のマストと7丁の櫓を備えていました。また、一般の帆走船では櫓を使用するのは無風時に限られるのに対し、押送船では常に櫓も使って漕走しました。押送船の名は、この漕走を重視した航法に由来しています。

押送船は東京湾などを航行する海船ですが、積荷を魚問屋へ陸揚げするために江戸市中の河川部までも進入できました。また、積荷の鮮度を保つために、江戸へ入る船舶を監視する浦賀番所で検査を受けずに通航できる特権が与えられていたといわれています。



『船鑑』享和2年(1802)写本
(船の科学館所蔵)

五大力船(ごだいきせん、ごだいきぶね)

五大力船(ごだいきせん、ごだいきぶね)は、江戸近辺の海運に用いられた海川両用の廻船です。特徴として、押送船同様、河川を航行できるように喫水が浅く、船体の幅が狭くなっています。そのため、海からそのまま河口に乗入れて、市中の河岸に横付けすることができました。

海では帆を立てて帆走し、河川では棹が使用できるよう、舷側に棹走りと呼ばれる台が設けられていました。全長：31尺(約9m)～65尺(約20m)幅：8尺(約2.5m)～17尺(約5m)貨重量：60石積(9トン)～500石積(75トン)とされています。



歌川廣重『山海見立相撲 上総木更津』
(船橋市西図書館所蔵)

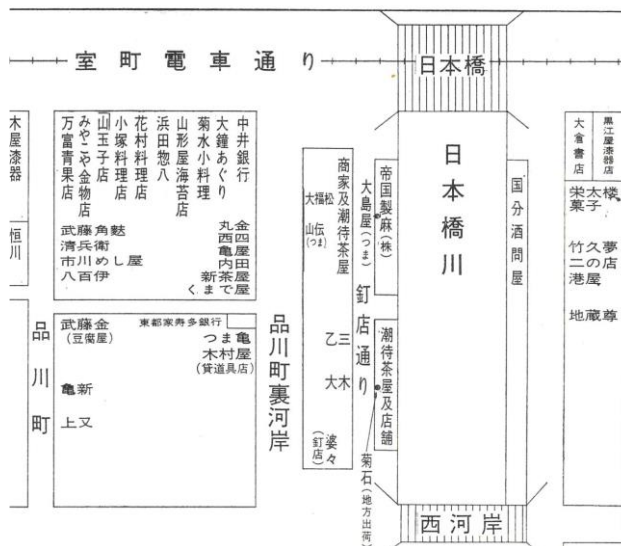
平田舟(ひらたぶね)

押送船や五大力船は、日本橋魚河岸に直接、荷揚げすることができましたが、魚河岸には、産地ごとに「平田舟」と呼ばれるいわば浮棧橋がありました。この荷揚げの使役のことを「小揚(コアゲ)」と言い、現在でも豊洲市場内の荷役会社に中央小揚、東都小揚、東京築地小揚という3社が、産地(出荷者)から市場に搬入される水産物の荷扱いをしています。

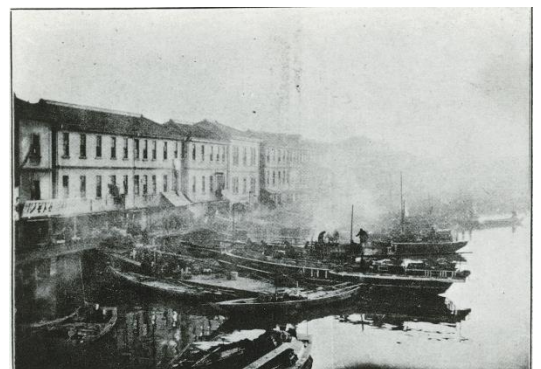
また、河川の潮の満ち引きにより、荷役の手間が違う(上げ潮のほうが下しやすい)ため、「潮の満ちるのを待ってその間にお茶でも飲んで・・・」ということで名付けられた「潮待茶屋」という施設もありました。

豊洲市場においても、潮待物流サービスという会社が、仲卸業者から小売商への荷物の引き渡し業務を行っています。

日本橋の河岸と潮待茶屋



平田船と潮待茶屋



日本橋魚市場—小揚— (大正11年刊)
(中央区立京橋図書館所蔵)

出典：魚河岸百年編集委員会、「魚河岸百年」、
(日刊食料新聞社(旧社)、1968)

食文化を支えた江戸前の魚

魚の行商人、ボテ振り

江戸は100万人の人口を有し人口密度も高く、多くの庶民は屋内で煮炊きすることは火事の原因になるとして今風でいうと「自粛」を余儀なくされていました。

そのため「ボテ振り」といわれた行商の人たちが、イワシの干物(安価で栄養価が高かった)や豆腐、納豆などを売り歩きました。

また、てんぷらやソバといった加熱調理食品は、屋台で販売され、鮎も元々は屋台で販売されるものでした。

近年、江戸の町は環境に配慮すると同時に意外と衛生であったと評価されていますが、今でいうファーストフードのルーツも江戸時代にさかのぼることができると考えられます。



初鯉売り



鮎売り

(出典：喜田川守貞『守貞謄稿』国立国会図書館蔵)

現在の江戸前

従来の江戸前は、右図にみられるように、埋立地となっており、漁業権も東京都が買い上げたため、明確に存在していません。しかし、今でも、ハゼなどは釣り上げられますし、整備された隅田川では釣り糸を垂らす人々が意外と多く目にすることがあります。

今年に入ってから新型コロナウイルス感染症の影響で食品産業は、一部を除き苦戦を強いられています。

明治期においても、コレラの流行の元凶が日本橋魚河岸であるとされ、明治22年(1889)に警視庁(当時衛生行政を担っていた)と東京府が日本橋魚河岸の移転を命じました。このように、感染症と食品産業には縁深いものがあります。

ちなみに、日本橋魚河岸は、数度にわたる移転命令にもかかわらず、断固移転を拒否し、大正12(1923)年の関東大震災を契機に築地へ移転します。

さらに、平成30(2018)年、豊洲へ移転したのはみなさんご存じのとおりです。



(出典：国土交通省 関東地方整備局 東京港湾ホームページ 東京港の埋立の変遷
<https://www.pa.ktr.mlit.go.jp/tokyo/history/pdf/e-do01.pdf> (参照2020-11-5))

4. 川と船が醸成した江戸文化

江戸時代、人とモノを運ぶ最も有効な手段が船でした。船は江戸と地方を結ぶだけでなく、江戸市中でも輸送手段として活躍し、庶民にとっても物資運搬や漁業といった職業だけでなく、信仰・行楽・趣味などさまざまな生活の場面で登場することになりました。江戸は水の都です。船が江戸固有の文化、情緒を作り上げる原動力にもなりました。

船がつなぐ関東と江戸

江戸幕府が開かれて間もない元和7年(1621)から、利根川の流れを銚子口にすると言う、いわゆる利根川東遷事業が行われました。それまでの利根川は中流から南下して江戸湾に注ぐ、今の江戸川がその流路でした。それを東の銚子まで延伸させて、そこに関東地方を流れる幾筋もの川をつなぎ合わせて、関東一円の水体系、奥川筋が完成しました。

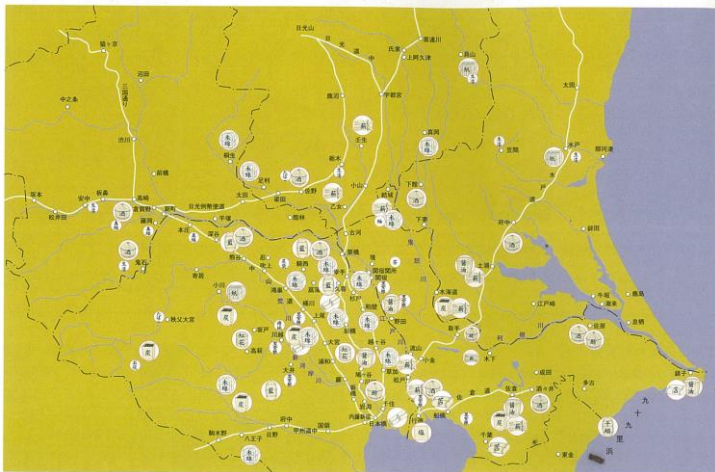
これにより江戸と関東の様々な地域が結ばれて、双方から物資が輸送されました。このことは関東の各産地の利益にもつながり、江戸の間屋商人も積極的に特産品生産を「発掘」し、江戸市場へともたしました。これには関東の村々で活躍した在方商人や買次商、船問屋、さらに川筋に生まれた多くの河岸が効果を発揮しました。

かつて箱崎と日本橋小網町の間を流れていた箱崎川には、寛永9年(1632)本行徳村(千葉県市川市)の村民が小網町3丁目の河岸地を専用の河岸地として使用し、行徳河岸と呼ばれたところがありました。まさに江戸と行徳を結ぶホットラインで、江戸初頭から房総方面からの物資輸送が行われたことが分かります。



『関八州田舎分限角力番附』（船橋市西図書館所蔵）
江戸時代の関東各地の特産品と商人の名前を番付にしています。江戸に運ばれる荷物で最も多いのは、特産品などの商品ではなく、年貢米です。年貢米にも幕府直轄領で徴収された米と、各藩の城下で売却・換金できなかった年貢米の余剰米などがありました。
番付には関東各地の特産品が挙げられています。穀物・干鰯（ほしか）・醤油・小間物・材木・荒物（雑貨）・呉服・造酒（酒造）等々、18世紀以降の関東商品生産地帯の成長をうかがわせる品目が並んでいます。

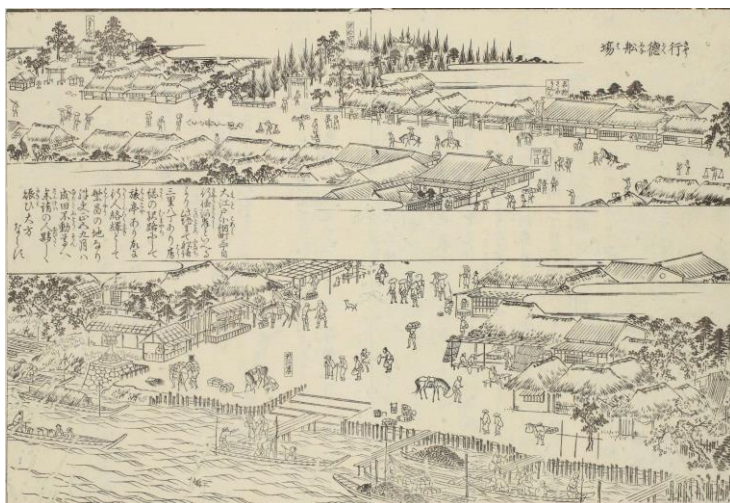
江戸へ入津した荷物



江戸へ入津した荷物

（出典：江東区中川船番所資料館常設展示図録、p24）
関東地方の各地で生産され、江戸へ輸送された商品です。
醤油・酒・塩・木綿・薪・炭・漆・藍・紙など、手工業製品を含む関東地方の生産物が消費都市・江戸へ運ばれていきました。

利根川筋からの江戸搬入の際は、小名木川の東端、中川番所で検査を受けて江戸へと向かいました。



斎藤月岑筆、長谷川雪旦画『江戸名所図会 行徳船場』
天保7年(1836)（国文学研究資料館所蔵）

行徳（千葉県市川市）の船着き場。江戸川河口からややさかのぼった所に川の湊がありました。関東各地から、船から船へと継送りで運ばれてきた物資は、この行徳あたりで、江戸への搬入を意識し、江戸市中の各所・各河岸に搬送できる船に仕立て直したり、荷物を確認したりと準備に入りました。

図左に見える常夜燈は、文化9年(1812)日本橋西河岸（日本橋川の日本橋と一石橋の間）と蔵屋敷の成田山参詣の講中が航路安全を祈願して建立したもので、江戸商人との結びつきをうかがわせます。

小名木川を通過した積み荷と査検方法

小名木川を通過した積み荷

船の積み荷については、その品目と数量を査検していました。江戸中期以降、江戸地廻り経済圏（関東地方一円）での特産品生産が盛んになると、江戸に流入する商品についても監視の目が及びました。ことに米・酒・硫黄・蠟・塩・俵物や樽物（海産物）・材木等の品目は御規定物(ごきじょうぶつ)といって、個々に制限や特別な手続きが必要でした。

積み荷の査検方法

酒を例にすれば、関東から地酒が多く搬送されるようになった場合、年貢としての米が酒に加工され、商品化しているような事態があれば、幕府としては看過できません。そこで酒造の状況調査を行うなどの措置が講じられました。

江戸からの荷物搬送を請負ったのが奥川筋船積問屋でした。小網町・小舟町・箱崎町辺の間屋で、それぞれの関東の各地域を担当していました。

御規定物のおもな種類と査検方法

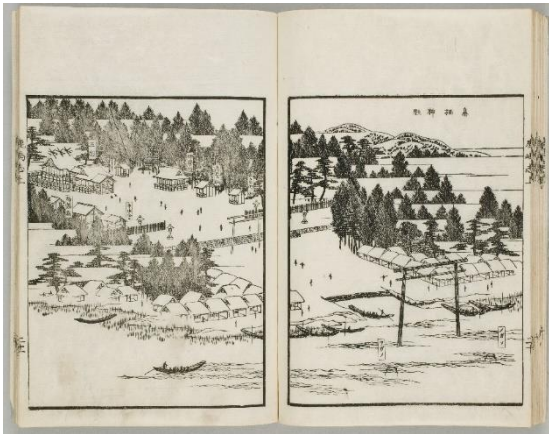
種類	査検方法
米荷物(入船)	幕府の年貢米は国名・村名や代官名・納め名主名について確認する 御三家の年貢米および買上米は国名・村名・納め名主名について確認する 大名の年貢米は印鑑の確認のみで船頭より俵数を報告する 旗本の年貢米は国名・村名・納め名主名・旗本名を確認する
米荷物(出船)	少量であればそのまま通船させる 高瀬船で出船する場合は普段と同様に売り主と荷受人の名前を記載した手形を提出する
酒(入船)	酒の印・駄数・酒造人の国名・村名・名前、荷受人の町名・問屋名・名前、および船頭の名前を確認する 手形は書役へ渡し、枚数・船頭の名前を帳面に書き写し、割判を済ませたのち、中川屋清蔵へ渡す
御用酒(入船)	酒荷物の手続きと同様であるが、入船したら直ちに書役に取り次ぎ、手形に割判を済ませ船頭へ渡す
上州硫黄(入船)	1カ年に12,000貫目までの規定がある 上州倉賀野宿の間屋庄左衛門方より積み送られるもので、江戸硫黄問屋の名前証文を差し出す 査検は小頭2名で改め、中川屋清蔵が立ち会う
生蠟	1箇の貫目を書添え、実印証文で確認し通船させる
塩(出船)	高瀬船で出船する場合は手形が必要、小舟の場合は断りだけで通船させる 積問屋仲間の証文を提出させる 武州・上州へ回漕する場合は塩問屋仲間の証文を提出させ通船させる
俵物・樽物(入船)	高瀬船・小船とも証文を提出させる 俵物・樽物とも少数であれば断りだけで通船させる 俵物は2俵、樽物は7〜8樽以上は手形や送状を提出させる
古銅類(入船)	実印証文を確認
取替酒(入船)	1駄片馬までは通常の手形で通船させる 2駄以上は本書役に相談し、酒引取りの証文を提出させる
筏・材木(入船)	行き先の川筋名・筏の枚数・筏領主を聞きとめ、即座に上役へ報告する 筏願書の控と照合する 2人乗りの場合は願書を提出しなくてよい
生魚・前菜物 (夜中入船)	夜間の通船を許可する 但し、船頭・宰領とも7人まで、それ以上の場合は一切通船させず、船は差し戻す 高瀬船・小船とも、積荷をよく改めた上で、通船させる とうがん・唐茄子・西瓜・真桑瓜・梨子・柿・葱・薩摩芋・空豆は通船させない むぎ身舟は夜中でも通船させる

※「中川御間所御規定伝達」弘化4年(1847)写(小松原康之助家文書)より作成。

小名木川を行きかう参詣客と物見遊山

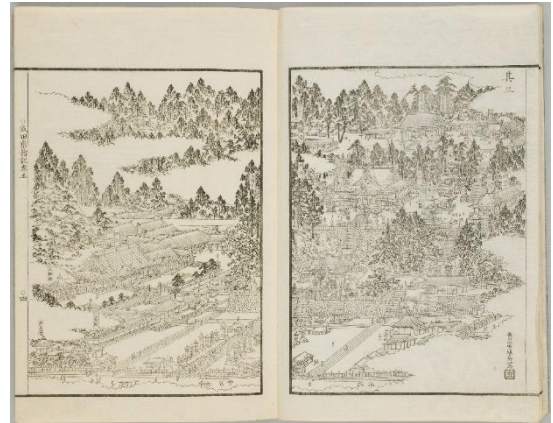
江戸からの旅

寺社参詣を名目にして、物見遊山の旅が流行しました。ガイドブックのような書物も出版され、情報が広まり、旅をサポートする業者（船・旅館の手配など）も現れるようになりました。中川番所を通ったが向かったのは、成田山新勝寺、香取神宮、鹿島神宮、息栖神社などで、2～3泊の行程で旅を楽しみました。



『鹿島名所図会 息栖神社』文政7年(1824)
(江東区中川船番所資料館所蔵)

鹿島・香取・息栖は、距離も近いことから三社詣として人気を集めました。この書物のようなガイドブックが「旅行ブーム」に拍車をかけました。



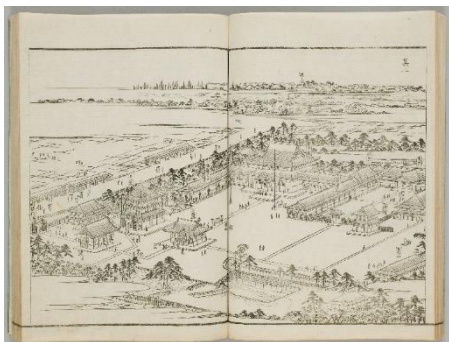
『成田名所図会 新勝寺』安政5年(1858)
(江東区中川船番所資料館所蔵)

新勝寺は現在でも参詣客の多い寺院。その初めは初代市川團十郎が、新勝寺の不動明王を深く信仰し、芝居でも上演し、屋号を「成田屋」としたことが弾みとなりました。

また深川富岡八幡宮の別当、永代寺では元禄16年(1703)以降11回にわたって新勝寺不動明王の出開帳が開かれ信仰を集めていました。これがなお一層、成田山詣を促し、人気を高めていきました。

江戸への旅

関東方面の人が、江戸へ出てくるにはどんな事情があるのでしょうか。その一つに幕府直轄地（公儀御領）からの村役人たちの姿がありました。彼らは村の経営上、年貢の減免、村内の河川・道路等の工事、村内の事件処理、村役人の交代等々のため、浅草橋際にあった御用屋敷（江戸中期までは郡代屋敷）へ申請・陳情の書類を提出しなければなりません。この時、両国広小路で楽しんだり周辺の江戸名所へと出かけました。こうした公用のためではなくても伊勢参りや大山詣の途中、江戸に立ち寄ることもありました。かつて江東区大島にあった五百羅漢寺は536体の羅漢像が堂内を荘厳する大寺院でした。残された江戸へ向かった人が残した旅日記、道中記には、この寺院の名がよく登場します。



『江戸名所図会 五百羅漢寺』（境内）
天保7年(1836)
(江東区中川船番所資料館所蔵)

境内のようす。現在の新宿線西大島駅周辺にありました。明治になって本所へ移転し、明治41年(1908)には目黒へ移転しました。新宗派の黄檗宗寺院で中国風の伽藍が珍しく、図中央の本殿から両側に伸びた羅漢堂に500体以上の羅漢像が安置されていました。また図左下の「サザエ堂」(堂内がらせん状で、富士山まで見渡せた)も寺のシンボルとして評判を集めました。



『江戸名所図会 五百羅漢寺』
(堂内) 天保7年(1836)
(江東区中川船番所資料館所蔵)

中央に釈迦牟尼仏が安置され、その両側から羅漢像が何段にもわたって参詣者を見下ろしています。画面手前の参詣者の中には旅姿の人も多くみられます。



歌川広重画『名所江戸百景 五百羅漢さざぬ堂』

(江東区中川船番所資料館所蔵)

羅漢寺のシンボル、さざぬ(え)堂を描いています。周辺は農村風景ですが同寺のすぐ南には小名木川が流れ、船で訪れることも可能でした。

江戸の日常と船

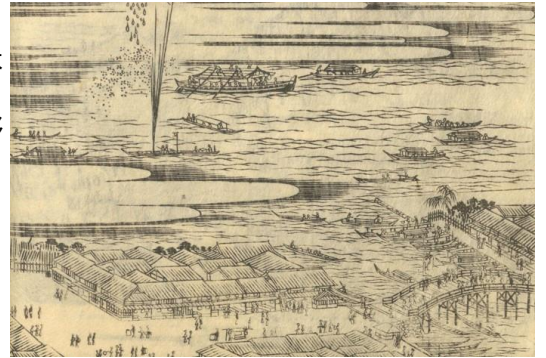
江戸の日常交通手段

江戸と周辺地域との関係から、江戸市中に目を向けてみると、船は江戸にとって必要不可欠な交通手段でした。市中に張り巡らされた川・運河は、物資輸送はもとより、仕事・信仰・行楽のための人の移動には欠かせないものでした。その実態を探ってみましょう。

船宿と乗り合い船

船宿には2種類ありました。上方方面からの大型船（弁才船や五大力船）に乗り組み、江戸へやってきた船頭・水主が宿泊するような大きな船宿、江戸市中の川筋に猪(ちょ)牙(き)船(ぶね)といった小舟を用意して客を市中の河岸へ運ぶ船宿。いずれも「船の宿り」で船宿でした。後者の船宿が集まっていたのは、隅田川沿岸の柳橋（神田川の河口）・山谷堀でした。

猪牙船といえは新吉原へ通う客を乗せたことで知られますが、こうした遊興だけでなく、川で涼む、重い荷物を運ぶなど事情は様々でした。また決められた航路を往復し、何人もの客を乗せる乗り合い船も利用されました。



長谷川雪旦画『江戸名所図会 両国橋』（部分）天保7年(1836)

（国文学研究資料館所蔵）

川開きでにぎわう両国橋西詰、神田川が隅田川にそそぐ河口に架かる柳橋あたり。何艘もの猪牙船と棧橋が描かれています。



長谷川雪旦画

『江戸名所図会 山谷堀 今戸橋慶養寺』（部分）天保7年(1836)

長谷川雪旦画（国文学研究資料館所蔵）

画面下が隅田川で、山谷堀河口の今戸橋付近に集まる船宿と猪牙船です。堀に沿って築かれた日本堤を北東にさかのぼれば新吉原でした。隅田川対岸との間には竹屋の渡しがあり、向島の三囲稲荷や牛島神社、長命寺など江戸郊外の名所に直結していました。



再現された船宿

（江東区深川江戸資料館）

再現された江戸末期深川の町並みの中にある船宿です。



歌川広重画『名所江戸百景 小奈木川五本まつ』

（国立国会図書館所蔵）

現江東区を東西に流れる小奈(名)木川のほぼ中間に、五本松がありました。実際の川は直線ですが、奥行を見せるため湾曲しています。見事な松の枝を乗り合い船が通ります。旅人でしょうか荷物も積まれています。

釣り

釣りは趣味であり、食料確保でもあり、江戸時代盛んにおこなわれました。市中の川や海浜には釣りの「穴場」があり、情報地図まで作られました。



長谷川雪旦画

『江戸名所図会 中川釣鱸』

天保7年(1836)

（国立国会図書館所蔵）

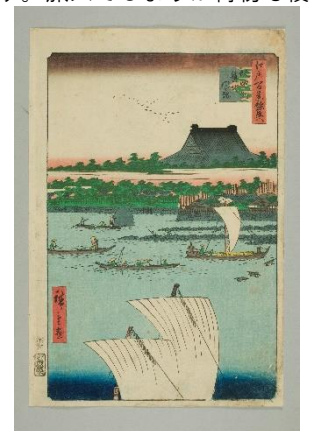
江東地域の東端、中川の河口近くは鱸釣りの名所として知られていました。少し上流で小名木川と接し、人や物資を改める中川番所がありました。



『江戸佃島沖船中道法図』

（江東区中川船番所資料館所蔵）

江戸近海の釣りの「穴場」を紹介した地図です。「此辺はるきすよし」などとコメントが入っています。「立込釣」「沖釣」などに適した場所が一目でわかります。



歌川広重画

『江戸百景余興 鉄砲洲築地門跡』

（江東区中川船番所資料館所蔵）

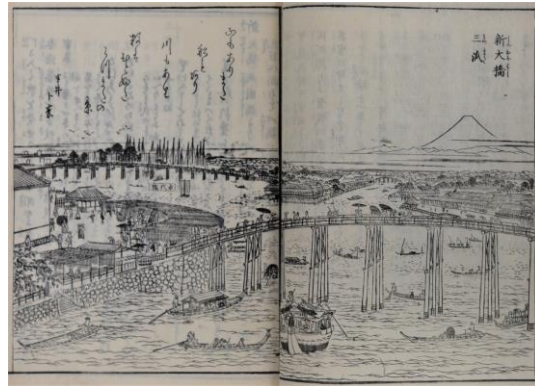
明暦の大火以降、築地本願寺を中心に埋立て・開拓が進められた築地には、渦巻き状に堀が開かれ、江戸湾につながっていました。江戸前魚介類の宝庫で、釣り舟や岩の上で釣りを楽しむ人でにぎわいました。

江戸の年中行事と船

納涼・花火

暦や四季の移り変わりごとに開かれる年中行事、イベントと船の関係を紹介します。

夏のうだるような暑さを避け、川に出て涼をとる。5月末から両国橋周辺で行われた川開きも、厄を落とし元気づけるための「仕掛け」でもありました。



歌川広重画『名所江戸百景 両国花火』
(国立国会図書館所蔵)

「錦絵で楽しむ江戸の名所」両国の川開きは、江戸中期、8代将軍徳川吉宗が市中の悪病退散を祈って始めたとされています。橋西岸の両国広小路の見世物・芝居・寄席、「向う両国」と呼ばれた東岸の本所回向院での勧進相撲、そして川面での納涼。川や船が江戸の盛り場を作りあげていました。

長谷川雪旦画『江戸名所図会 新大橋三派』天保7年(1836)
(東京海洋大学附属所蔵)

涼を求めて新大橋周辺に集まる船。屋形船(橋手前正面)・屋根船(橋手前左手・猪牙船(橋手前左手、屋根がない)といった納涼船のほか、橋の奥には投網や竿で漁・釣りをする人も描かれています。画面左手が深川側で、沿岸にはよしず張りの水茶屋が並んでいます。画面奥、永代橋の向こうに見える樹木が茂っているのが石川島・佃、その右に林立する「柱」は、上方から下り荷物を運んできた弁才船の帆柱で、築地明石町辺になります。

行楽・花見

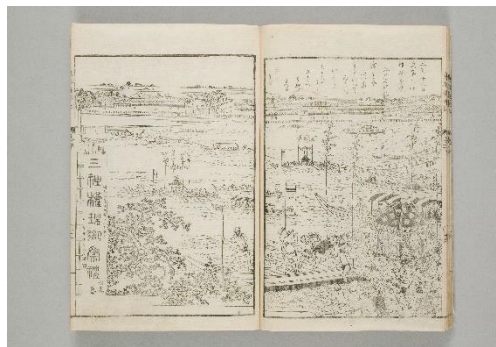
四季折々の行事や行楽にも、船が活躍しました。



歌川広重画

『名所江戸百景 吾妻橋金龍山遠望』
(江東区中川船番所資料館所蔵)

降ってくる桜の花びらを受けて進む屋根船に乗っているのは、わずかに見えるかんざしから芸者さんでしょうか。右手の五重塔と本堂が金龍山浅草寺。それより上流の隅田川を横切っている船、竹屋の渡しということになります。画面右手に山谷堀河口と待乳山聖天、左手は三囲神社へ続く墨堤。江戸名所の粋が集まったこの絵こそ、船が織りなす江戸名所です。



長谷川雪旦画『東都歳事記 浅草三社権現祭礼』天保9年(1838)
(江東区中川船番所資料館所蔵)

かつては3月17日・18日隔年で開催されていた浅草三社権現(浅草神社)祭礼のようすです。

18日にこの船渡御が行われました。神輿を神社から浅草御門(浅草橋)まで担ぎ、そこから船に乗せて隅田川へ。花川戸辺までさかのぼり、地上に戻って隨身門(二天門)から神社へ。六郷大森の村からも漁船が出たそうです。江戸屈指の古社の祭礼に船は欠かせませんでした。船渡御は昭和33年(1958)まで続き、祭礼700周年の平成24年(2012)に、58年ぶりに挙行されました。



3世歌川豊国(国貞)画

『初卯ノ日妙儀(義)参り乃図』
(江東区中川船番所資料館所蔵)

亀戸天神社境内にある妙義(大嶽)神社の正月最初の卯の日に行われた行事で、柳の枝に繭玉(まゆだま)や千両箱・面などを付けた縁起物(絵の右手屋根の上)が評判でした。

参詣を終えて、着飾った芸者衆が屋根船に乗り移ろうとしています。奥に鳥居が見えることから、この場所は神社の西脇を流れる横十間川であり、妙義神社への近道でもありました。

展示目録

* 一部の展示資料は都合により変更される場合があります

「江戸の絵図」

- ・ 長禄年中江戸絵図（複製）
製作者・製作年不明 写本 85 × 84 cm
東京大学総合図書館（南葵文庫）所蔵
- ・ 分間江戸大絵図（複製）
須原屋茂兵衛板行 文政11年（1828）165×165cm
江東区中川船番所資料館所蔵

この大絵図は、江戸後期の文政11年（1828）に日本橋の江戸版元の最大手、須原屋茂兵衛から刊行された。



分間江戸大絵図

1. 「廻船で江戸を酔わせた上方の酒文化」

- ・ 江戸名勝図会 新酒番船江戸新川入津図（複製）
歌川広重（二代目）文久元年～元治元年（1861-1864）
関西学院大学図書館所蔵

これは二代広重の代表作である「江戸名勝図会」のうち、現在知られる71枚の中の1枚である。

新酒番船とは、享保12年（1727）頃から始まった行事で、約10艘の廻船が大坂もしくは西宮を同時に出帆して、その年の最初の酒を江戸に輸送する速さを競うレースであった。



新酒番船江戸新川入津図

- ・ 錦絵 菱垣新綿番船川口出帆之図（複製）
含粹亭芳豊画 安政期（1854-1859）頃 37×76.5cm
船の科学館所蔵



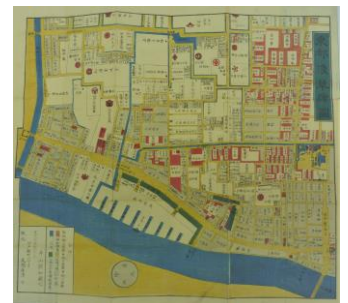
錦絵 菱垣新綿番船川口出帆之図

- ・ 江戸積酒屋番付（複製）
製作者・製作年不明 写本 45.3×31.5cm
関西学院大学図書館所蔵

- ・ 東都浅草繪圖
井山能知圖 文久元年（1861）50×55cm
東京海洋大学附属図書館越中島分館所蔵

嘉永年間刊行図を中心とする尾張屋板江戸切絵図28図。本図の収図範囲は、台東区浅草雷門から神田川までの南部地域。

- ・ 御米倉絵図（複製）
江戸中期 48.3×127cm
船の科学館所蔵



東都浅草繪圖

- ・ 写真 堂島米穀取引所 撮影年不明
大阪市立図書館所蔵



堂島米穀取引所

- ・ 和船模型
製作者・製作年不明
東京海洋大学明治丸海事ミュージアム所蔵

2. 「上州からの山の幸 ー利根川で結ぶ江戸ー」

- ・ 日本山海名物圖繪 5巻
平瀬徹齋撰、長谷川光信画 寛政9年（1797）
東京海洋大学附属図書館所蔵
- ・ 日本山海名産圖會 5巻
木村兼葭堂著、蔀関月画 寛政11年（1799）
東京海洋大学附属図書館所蔵
- ・ 関八州田舎分限角力番付（複製）
酒井喜熙 安政2年（1855） 木版 47.2×32.7cm
船橋市西図書館所蔵

穀物・干鰯・醤油・酒・小間物・呉服などがあげられており、18世紀なかばから関東の地場産業が発達していたことがうかがえます。これら商品は地廻り荷物と呼ばれ、江戸へと運ばれました。

- ・ 利根川図志 赤松宗旦著 安政2年（1855）
東京海洋大学附属図書館所蔵
- ・ 本朝食鑑 12巻
人見必大著 元禄5年（1692）
東京海洋大学附属図書館所蔵

江戸前期の食物本草書。庶民の日常生活の食膳にのぼることの多い国産食物に重点をおき、和名を中心として、12巻10冊本として刊行。

- ・ 大日本物産図絵 下総醤油造の図（複製）
歌川廣重（三代目）画 明治10年（1877）
千葉県立関宿城博物館所蔵
- ・ 下河岸 醤油積み出し写真
大正時代～昭和初期

枅田家所蔵
公益財団法人高梨本家 上花輪歴史館写真提供



日本山海名物圖會



関八州田舎分限角力番付



下河岸 醤油積み出し写真

3. 「江戸湾の海の幸 ー江戸前の昔と今ー」

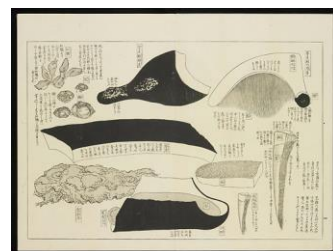
- ・ 江戸名所圖會 7巻20冊 齋藤長秋編輯 齋藤県麻呂・齋藤月岑校正
長谷川雪旦畫圖 天保年間
東京海洋大学附属図書館所蔵
- ・ 魚かぐみ 2巻
武井周作著 天保2年（1831）
東京海洋大学附属図書館所蔵

武井周作は住居を日本橋長浜町に移したのを好機として、近くの魚市場で魚介類を観察し、産地や漁期や食べ方などを尋ね、さらに文献を調べて『魚鑑』を完成。133種の魚介類について、いろは順に配列して記述しており、読み物としてもおもしろい本。

- ・ 利根川名所勝景図絵（複製）
筆者不明 江戸時代（成立年不明） 966.7×27.2cm
船橋市西図書館所蔵
- ・ 勇魚取繪詞
小山田與清著 天保3年（1832）
東京海洋大学附属図書館所蔵



魚かぐみ



勇魚取繪詞

・ 鯨肉調味方

小山田與清著 天保3年（1832）

東京海洋大学附属図書館所蔵

・ 写真 帝都名所日本橋魚河岸及び人形町馬喰町方面の遠望
年代不明

中央区立京橋図書館所蔵

・ 写真 江戸橋より魚河岸を望む

日本橋記念誌 明治44年（1911）刊

中央区立京橋図書館所蔵

・ 錦絵 東都名所 日本橋真景并二魚市全図（複製）

溪斎英泉画 江戸後期 37.3×76.3cm

国立国会図書館所蔵

・ 繪本江戸土産 10巻

歌川廣重画 嘉永3年叙～慶應3年序（1850-1867）

東京海洋大学附属図書館越中島分館所蔵



帝都名所日本橋魚河岸及び人形町馬喰町方面の遠望



東都名所 日本橋真景并二魚市全図

4. 「川と船が醸成した江戸文化」

・ 錦絵 江戸八景 日本橋の晴嵐（複製）

溪斎英泉画 弘化（1843-1846）頃

国立国会図書館所蔵

・ 日々徳用俚約料理角力番附取組（複製）

幕末頃 18.2×23.8cm

東京都立図書館 加賀文庫所蔵

江戸時代のおかずの為の番付。「きんぴらごぼう」や「煮豆」、「めざし いわし」など、現在でもおなじみのメニューなどが散見される。

・ 素人庖丁 3編

歌川廣重画 享和3年～文政3年（1803-1820）

東京海洋大学附属図書館所蔵

・ 魚類精進 早見献立帳

歌川廣重画 天保（1830-1844）頃

東京海洋大学附属図書館所蔵

・ 錦絵 縞揃女弁慶 [安宅の松]（複製）

歌川国芳画 天保15年（1844）刊

東京都立図書館所蔵

江戸で一番贅沢なすしとして有名な深川安宅六軒堀（江東区新大橋あたり）にあった「松ヶ鮓」を描いた作品

・ 錦絵 東都名所高輪廿六夜 待遊興之図（複製）

歌川廣重 天保（1830-1844）末期 36.7×25cm

太田記念美術館所蔵

・ 新版御府内流行名物案内双六（複製）

幕末頃 18.2×23.8cm

国立国会図書館所蔵

日本橋朝市を振出しとして、山王御祭礼で上がる絵双六です。双六の形式を取りながら、当時江戸で流行していた名物を描いています。食べ物や飲食店の名前も数多く見ることができます。



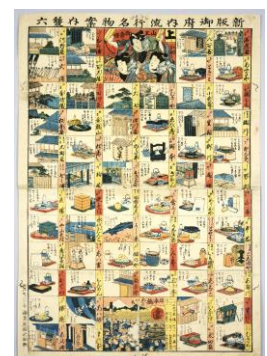
江戸八景 日本橋の晴嵐



素人庖丁



縞揃女弁慶 [安宅の松]



新版御府内流行名物案内双六

おわりに(企画展示の全4回を振り返って)

東京海洋大学海洋工学部の前身である東京商船大学は、明治8年11月(1875)に私立三菱商船学校として設立され、その後国立東京商船大学を経て、現在に至っています。この間、隅田川のほとり霊岸島に始まり、後に現在の地の越中島に移り、船員教育はもとより、海、船、物流にかかわる教育研究に携わってきました。

東京湾に接する越中島の地は、江戸時代に埋め立てられた場所ですが、江戸下町として、江戸時代から続く文化が醸成されています。近くには、江戸三大祭りが開かれる富岡八幡宮や、成田山東京別院の深川不動堂などがあります。隅田川の対岸には家康が大坂から漁民を呼び寄せ住ませ日本橋魚河岸にも縁の深い佃島、上方からの酒を届けられた新川があります。

このように船を中心に教育研究してきた歴史を持つ大学だからこそ、また江戸文化を担ってきた下町にあるからこそ、使命にも似た想いをもって「船が育んだ江戸」の展示を企画しました。江戸から学び現代にも通じる船の役割を考えていただければ幸いと願った次第です。おかげさまで、第1回の「海」、第2回の「川」、第3回の「船」と続き、今回最終回の第4回の「恵み」にたどり着くことができました。

この4年間の間に、多くの皆様に企画展示をご覧いただくとともに講演会にも来ていただきました。また、展示や図録作成に当たっては、多くの方々のご協力を得ました。特に、(一財)山縣記念財団には、3年間にわたり助成していただくとともに後援をいただきました。

あらためて、皆様に感謝とともに御礼を申し上げます。ありがとうございました。

令和2年 11月

監修者 東京海洋大学名誉教授 苦瀬 博仁

実行委員会

第1回、第2回：稲石正明、佐藤秀一、塚本達郎、岩坂直人、庄司邦昭、苦瀬博仁、石田一明

第3回、第4回：庄司るり、塚本達郎、岩坂直人、庄司邦昭、苦瀬博仁

図録執筆者一覧(図録掲載順)

第1回 海：

苦瀬博仁(東京海洋大学名誉教授)、岩坂直人(東京海洋大学教授)、大貫伸(日本海難防止協会)・庄司邦昭(東京海洋大学名誉教授)、金岡京子(東京海洋大学教授)・仲野光洋(東海タンカー(株))・石田一明(東京海洋大学附属図書館司書)

第2回 川：

苦瀬博仁・安藤令(三井住友海上保険(株))、木村達司(株)建設技術研究所、国土文化研究所)、久染健夫(江東区中川船番所資料館)、森本博行(オフィスキヨモリ、元築地市場場長)・久染健夫・苦瀬博仁

第3回 船：

庄司邦昭、小堀信幸(船の科学館)・庄司邦昭、仲野光洋・苦瀬博仁、大貫伸(内外地図(株))、久染健夫

第4回 恵み：

大浦和也(公益財団法人白鹿記念酒造博物館)、中山剛志(群馬県立渋川青翠高等学校、元群馬県立歴史博物館)、森本博行、久染健夫(前中川船番所資料館次長)

図録編集：東京海洋大学附属図書館 企画展示ワーキンググループ

附属図書館越中島分館 これまでの展示

第1回	所蔵古地図等（展示目録）	2008年	7月21日（月・祝）	越中島会館 2階資料展示室
	仏教的世界観にもとづく世界図『南瞻部州萬国掌葉之図』（宝永7年[1710]刊）、新刻萬国輿地図（明治4年[1871]刊）など江戸期から明治初頭の日本の古地図を中心に17点展示。			
第2回	明治丸所蔵資料等他公開	2009年	7月20日（月・祝）	越中島会館 2階資料展示室
	「海の日」記念行事として明治丸所蔵資料や和船関係資料、商船学校等時代の写真ほかを展示。			
第3回	海へと広がる志	2010年	7月19日（月・祝）～ 10月28日（木）の火・木	百周年記念資料館 （越中島キャンパス）
	NHK大河ドラマ『龍馬伝』に東京海洋大学から貸し出した六分儀ほか明治時代の船具の数々を展示。			
第4回	蔵出しお宝展	2012年	7月3日（火）～7月31日（火）	百周年記念資料館 （越中島キャンパス）
	犬養毅ほか本学を訪れた著名人たちの揮毫、重要文化財明治丸関連資料、登録有形文化財である第一・第二観測台関連資料を展示。			
第5回	明治を輝（て）らした光 ー燈台巡廻船明治丸の活躍ー	2013年	7月2日（火）～7月31日（水）	百周年記念資料館 （越中島キャンパス）
	明治丸は明治天皇の御座船や小笠原領有への貢献が知られているが、本来の任務は燈台巡廻船。巡廻船としての足跡をたどるとともに、燈台の貴重な錦絵や写真等を展示。			
特別展示	海のしごと～船員のくらしとキャリア～	2012年	11月12日(月)～12月20日(木)	図書館 2階エレベーター前
	海事図書館との共催。船員のしごとや船上でのくらし、船員のキャリアについてパネルで紹介。船員の制服などを展示。			
第6回	商船学校を周（めぐ）る街々	2014年	7月1日（火）～7月31日（木）	百周年記念資料館 （越中島キャンパス）
	海洋工学部の前身である商船学校が明治35年1月に越中島に移転してきて以来、本学は隅田川周辺の街々と様々な交流の歴史を刻んできた。本学を周る街々の江戸期や明治～昭和期の絵葉書や古地図、錦絵などの展示。			
特別展示	深川、水の記憶 ～商船学校を周る街々関連展示～	2014年	6月25日（水）～8月22日（金）	図書館 2階エレベーター前
	「商船学校を周（めぐ）る街々」に先駆け、「深川、水の記憶」と題して関連展示。江戸期の古地図「深川絵図」や明治期の地図「東京市深川区全図」のレプリカを軸として、水の都としての深川と水の関わりについて紹介。			
特別展示	キャプテン・クック最初の航海 ー探求の旅とその遺産ー	2015年	2月16日（月）～4月27日（月）	図書館 2階エレベーター前
	キャプテン・クックは、果敢な探求心で南太平洋を航海し、タヒチやニュージーランドなどの正確な海図を作成。本展示では、キャプテン・クックの第1回航海に使用したエンデヴァー号のイラストや18世紀末の古地図（レプリカ）を軸として、最初の航海の様子とその成果について紹介。探検航海中に作成した海図、スケッチが載っている資料やエンデヴァー号の本など関連書籍も展示。			

第7回	船が開く 明治～商船教育140年記念展示～	2015年	7月1日（水）～11月30日（月）	百周年記念資料館 （越中島キャンパス）
	三菱商船学校が、明治8年に校舎としたのは、永代橋下流に碇置された初代練習船成妙丸だった。それ以来、船とともに本学部の歴史は刻まれてきた。和船から汽船へと移り変わる日本の船の歴史や本学部の成り立ちを、錦絵や公文書（複製）、写真等で紐解きながら、商船教育140年の歴史を紹介。			
第8回	帆走する和船～江戸の内航海運～	2016年	6月4日（土）～8月26日（金）	図書館2階 展示スペース
	江戸期に構築された広範な内航網を帆走した和船の航海術に焦点を当て、和磁石、海路図、船絵馬（複製）などの資料や関連書籍を展示し、日本の近代海運の礎となった和船の世界を紹介。			
第9回	船が育んだ江戸 ～百万都市・江戸を築いた水運～ （1）海 ―海流・海難・海損―	2017年	12月12日（火）～ 2018年2月17日（土）	明治丸記念館 （越中島キャンパス）
	水運の観点から百万都市江戸の誕生と成長の姿を探るシリーズ。その第1回は、日本および関東沖合の海流や気象を概観し、江戸への物流を阻み海難を引き起こす海原に、先人たちがどのようにして立ち向かい安定的な水運を確立させたかを、本学並びに他機関所蔵の史料・資料を通じて紹介・解説。			
第10回	船が育んだ江戸 ～百万都市・江戸を築いた水運～ （2）川 ―河川・運河・河岸―	2018年	11月22日（木）～ 2019年2月16日（土）	明治丸記念館 （越中島キャンパス）
	第2回は江戸時代の物資輸送のための「運河や水路の開削」、物資の揚げ場であり盛り場の原型となった「河岸」について、世界の都市計画と比較しつつ、関連資料と解説パネルを展示。			
第11回	船が育んだ江戸 ～百万都市・江戸を築いた水運～ （3）船 ―船・舟・船番所―	2019年	11月21日（木）～ 2020年2月15日（土）	明治丸記念館 （越中島キャンパス）
	第3回は船の歴史と構造、江戸の海運、河川水運と操船、船番所の役割などの視点から、本学や他機関の資料を通じて江戸の発展に寄与した船の役割を紹介・解説。			
第12回	船が育んだ江戸 ～百万都市・江戸を築いた水運～ （4）恵み ―商品・取引・文化―	2020年	11月17日（火）～ 2021年2月16日（火）	明治丸記念館 （越中島キャンパス）
	最終回の第4回は、廻船と上方からの酒、上州から山の幸、江戸湾の海の幸、川と船が醸成した江戸の文化の4つの視点から、本学や他機関の資料と解説パネルによって、百万都市の江戸の姿を紹介。			

主催・共催・後援

主催：東京海洋大学附属図書館

共催：東京海洋大学明治丸海事ミュージアム

後援：一般財団法人 山縣記念財団

協力(五十音順・敬称略)

青芋復活夢見隊、おいしい山形推進機構、大阪市立図書館、太田記念美術館、株式会社オフィス・キヨモリ、株式会社こちずライブラリ、株式会社小学館、関西学院大学図書館、金融庁、クックパッド株式会社、車浮代、群馬県立渋川青翠高等学校、群馬県立歴史博物館、有限会社源草社、江東区中川船番所資料館、江東区深川江戸資料館、国文学研究資料館、国立国会図書館、国立情報学研究所、株式会社ダイヤモンド社、千葉県立関宿城博物館、千葉県立中央博物館、中央区立京橋図書館、東京大学附属図書館、東京都立図書館、株式会社日刊食料新聞社、日本銀行金融研究所貨幣博物館、日本取引所グループ、公益財団法人白鹿記念酒造博物館、公益財団法人高梨本家上花輪歴史館、廣野勝、船橋市西図書館、船の科学館、株式会社平凡社、防府市、株式会社ワニブックス

第12回企画展示

「船が育んだ江戸～百万都市・江戸を築いた水運～」

(4) 「恵み」実行委員会

庄司るり、井関俊夫、岩坂直人、庄司邦昭、苦瀬博仁

「船が育んだ江戸～百万都市・江戸を築いた水運～」

(4) 恵み ―商品・取引・文化― 図録

監修：苦瀬博仁

担当：大浦和也（廻船で江戸を酔わせた上方の酒文化）

中山剛志（上州からの山の幸 ―利根川で結ぶ江戸―）

森本博行（江戸湾の海の幸 ―江戸前の昔と今―）

久染健夫（川と船が醸成した江戸文化）

編集：東京海洋大学附属図書館 企画展示ワーキンググループ

2020年11月17日

発行：東京海洋大学附属図書館 越中島分館

〒135-8533 東京都江東区越中島2-1-6

TEL：03-5245-7362 FAX：03-5245-7334

<https://lib.s.kaiyodai.ac.jp/>